「教育臨床総合研究紀要４　2005研究」

物語受容の比較文化的研究

―― 二つの「きつね」物語をテキストとして ――

A study of comparative culture research on narrative reading of children

足　立　悦　男*
Etsuo ADACHI

要　旨

本稿は、同一テキストを教材とした、児童の物語受容の比較文化的研究である。私はかつて、釜山教育大学校との共同研究において、日・韓の昔話・民話について比較研究を行ったことがある。[1] また、日本の文学教育を異文化の視点から問い直す、比較文学教育の必要性を提案したこともある。[2] 本稿もその一つの試みである。本稿では、二つの実践を取り上げる。一つは、山本美千枝氏の『きつねとたぬきのばけくらべ』をテキストとした、韓国と日本の読みの比較研究である。もう一つは、先行研究として付宣紅氏の『ごんぎつね』をテキストとした、中国と日本の読みの比較研究である。二つの「きつね」の物語をテキストとした、日・韓、日・中の子どもたちの物語受容の比較研究である。『ごんぎつね』については比較文化論を参考にした。

[キーワード]　物語受容　比較文化　比較文学教育

１．共通教材－『きつねとたぬきのばけくらべ』

韓国大田（テジョン）市の文旨（ムンジ）初等学校を訪問したのは、2003年２月11日～12日であった。大田市郊外の高台にある私立の小学校である。小雪の舞う、寒い朝であった。校長先生はじめ教職員の皆さんに温かく迎えられた。授業の合間には古典芸能などの授業、図書館、コンピュータルームなど学校施設の見学も行った。また、授業後には日韓の国際理解教育をめぐって教員との交流会も行われた。

ムンジ初等学校では日本人教師による三つの授業が行われた。[3] ここで取り上げるのはその一つ、山本美千枝氏による『きつねとたぬきのばけくらべ』の「読み聞かせ」実践である。この実践は、日本と韓国の子どもたちを対象に、同じテキストを教材とした「読み聞かせ」の比較研究であった。この実践には私も共同研究者として参加していたので、観察者としての観点も入れて考察していきたい。

＊ 島根大学教育学部言語文化教育講座

比較研究のテキストは、『きつねとたぬきのばけくらべ』(松谷みよ子・文　ひらやまえいぞう・絵　童心社　1989年) という絵本を使用した。日韓児童の物語受容の比較研究のテキストなので、ストーリーが単純・明快なこと、日本の文化を背景としたもの、児童にとって感想をもちやすく、人物に対して評価しやすいもの、という基準で選定した。

『きつねとたぬきのばけくらべ』は、次のような作品である。(番号は絵本の見開き２ページ分を示す。)

①むかし　むかし　こっちの　やまに　きつね が　いてね
　むこうの　やまの　たぬきに　とっても　いばって　てがみ　かいたの
②こら　たぬき　ばけくらべを　しよう　すぐに　おみやの　まえまで　やってこい
　たぬきは　びっくりして　めを　ぱちくり　させたって
③さあ　たぬきを　やっつけるぞう　きつねは　　きのはっぱを　あたまに　のせて
　くるっ！
④ぱっ！
　きれいな　きれいな　およめさんに　なりましたって
　おや　しっぽが　でているぞ　しっぽ　きえろ　きえろ
⑤もう　だいじょうぶ　きつねの　ばけた　およめさんは
　しゃな　しゃな　あるいて　いきましたって
　そうしたらねえ　いい　においが　するの
　くんくん
⑥おみやの　まえに　おまんじゅうが　ひとつ
　おいしそうな　おまんじゅう！
⑦きつねの　およめさんが　とびつくと　おまんじゅうは　ぽーんと　はねあがって
⑧たぬきに　なりました
⑨やーい　やーい　くいしんぼきつね　おまんじゅうに　だまされた　やーい
⑩きつねは　ぐえんこ　ぐえんこ　なきながら　おやまに　にげて　いきましたって
　これで　おしまい　しゃーん　しゃーん

日韓の比較研究ということを考えて、テキストはストーリーの単純なものを選んだ。この絵本は頁をめくるごとにストーリーが劇的に展開していく。また、「ばけくらべ」という、子どもたちの大好きな「変身」をモチーフにしているので、日韓の子どもたちの興味・関心を引きやすい。狐や狸の「ばけくらべ」は、日本の昔話によく出てくる物語であり、日本昔話の代表的なモチーフである。異文化テキストは異文化理解の学習でもあるので、その国の典型的なモチーフの作品とすべきである。このテキストは、その意味で、ストーリー、モチーフともに日本文化の特徴をよく表している。

この作品は絵本としても、よくできている。ひらやまえいぞうの絵は、背景を描かないで、人物だけを大きくクローズアップして描いてあり、子どもたちの関心を人物の行動に焦点化できる、というメリットがある。狐と狸は子どもらしい表情で描かれ、狐の化けたお嫁さんは典

型的な花嫁姿をしている。韓国の子どもたちにとって一目で異文化とわかる絵であり、日本文化に関心をもつきっかけにもなる、という見通しもあった。

このようなテキストの性格から、異文化交流の導入的な学年として、日韓ともに小学校の３年生を調査対象に選んだ。

２．昔話絵本の「読み聞かせ」－韓国・ムンジ初等学校３年生

さて、ムンジ初等学校での『きつねとたぬきのばけくらべ』の授業（３年５組　36人）は、通訳を通して、以下のように展開された。

１）「おはよう」を日本語で覚える（単語カード）
２）絵本『きつねとたぬきのばけくらべ』を紹介する。
　・狐と狸の紹介（ペープサートを使って）
　・絵本の読み聞かせ（韓国語で）
　・面白かったところをワークシートに書く。発表する。（ワークシート）
　・絵本の中の日本について説明する。（花嫁衣装、お宮）（写真　単語カード）
３）「きつね」か「たぬき」に手紙を書く。発表する。
４）日本の子どもの「感想文」を紹介する。感想の交流を行う。
５）絵本の読み聞かせ（日本語で）

授業の導入（１）は、午前中だったので、「おはよう」という挨拶言葉の紹介から始まった。何度か練習すると子どもたちはすぐに覚えた。初めて覚えた日本語であった。

（２）は絵本の読み聞かせである。その前に、ペープサートを使って登場人物の狐と狸の紹介を行った。「昔話の狐や狸は化けるんだけど、知ってる」と聞くと、「アンニョン」（しらない）と答えた。「ばけくらべ」という変身のモチーフに、子どもたちの関心が集まった。

絵本の読み聞かせは、初め（韓国語）と終わり（日本語）と二回行った。まず、韓国語で読み聞かをした。子どもたちは静かに聞いていたが、「オルレリ　コルレリ　モッポヨー」（やーい　やーい　くいしんぼ　きつね）で、子どもたちは笑った。昔話特有のオノマトペに反応がよかった。読み終わると、絵本を拡大したカラーコピーを順番に黒板にはっていく。そして、ワークシートを渡して感想を書くように指示した。ワークシートの課題は、以下の２つ。

１．このおはなしのどんなところがおもしろかったですか。おもしろかったわけも書きましょう。
２．きつねさんかたぬきさんにお手紙をかきましょう。えらんだわけも書いてください。

授業の（２）では、課題の「１」について書き、発表してもらった。狐が「くるっ　ぱっ！」と化けるところ、狸が化かすところに人気があった。いずれも「ばけくらべ」のシーンであった。子どもたちの関心は人物の行動に集中していた。そのために、予想していた異文化性（花嫁衣装やお宮）に対する関心は、この段階ではまだ見られなかった。

そこで、しばらく時間をとって、「花嫁衣装」と「お宮」の説明を行った。花嫁衣装には松、

竹、梅、また鶴、亀などが描かれていて、日本では縁起のいいものの代表であること。また、狸の化けた「おまんじゅう」は、お宮のお供えものであること。拡大版の「絵」を使って説明されると、子どもたちは興味ぶかく聞き入っていた。その後は、(３)「登場人物に手紙を書く」。(４）は時間がとれなくて省略した（後に感想文の相互交流として実現する)。最後の（５）では日本語による読み聞かせを行った。ストーリーをすでに知っていること、「絵」を見ながらの読み聞かせであることで、子どもたちは絵本を見ながら日本語に耳を澄ましていた。このように、通訳の方を交えての授業であったが、日本から来た小学校の先生ということもあって、子どもたちの興味・関心を引きつけながら、なごやかな授業展開になった。

３．昔話絵本の「読み聞かせ」－日本・境小学校３年生

この授業研究は、物語受容の比較研究なので、韓国に行く前に、日本の小学校において同じ学習指導案で授業がなされていた。日本での授業は、山本氏の勤務校、鳥取県境港市立境小学校３年竹組（36人）で、2003年２月６日に行われた。学習指導案は、以下の通りである。

１）絵本「きつねとたぬきのばけくらべ」を楽しむ。
　・狐と狸を紹介する。(ペープサート)
　・絵本の読み聞かせをする。(日本語で)
　・面白かったところをワークシートに書く。発表する。
　・絵本の中の日本について説明する。(花嫁衣装　お宮)
２)「きつね」か「たぬき」に手紙を書く。発表する。
３）絵本の読み聞かせをする。(韓国語で)
４）韓国語の「おはよう」を覚える。(単語カード)

比較研究であることから、学習指導案の基本部分は日韓で全く同じにしてあった。また、韓国の３年生の子どもたちと感想の交流をすることも伝えてあった。

読み聞かせは２回行い、、韓国とは逆に１回目（１）は日本語で、２回目（３）は韓国語で行った。(３）の題名と（４）の挨拶はハングル文字のカードを使用した。韓国語での読み聞かせでは、初めてのハングルの響きに多くの児童が興味をもった。このように、授業展開は日韓で全く同じになるように計画してあった。したがって、子どもたちの物語受容の感想は同じような条件下で書かれたことになる。

４．物語受容の比較分析－日本・韓国

以下、この授業について、授業者であった山本氏のデータ分析を紹介しながら、日韓児童の物語受容の結果を比較してみる。ワークシートには二つの問いがあった。まず、問１の「面白かったところをワークシートに書く。発表する」は、以下のような結果であった。(人数は延べ人数を示す。)

1）問1「このおはなしのどんなところがおもしろかったですか。おもしろかったわけも書きましょう」

【日本】

1．きつねがおまんじゅうにとびついたところ（⑦場面）　(10人)
2．きつねがたぬきにだまされたところ（⑨場面）　(10人)
3．きつねが「ぐえんぐえん」と泣くところ（⑩場面）　(７人)
4．おまんじゅうがぽーんとはねあがったところ（⑦場面）　(７人)
5．おまんじゅうがたぬきになったところ（⑧場面）　(５人)
(以下、略)

【韓国】

1．たぬきがきつねをからかうところ（⑨場面）　(17人)
2．きつねがおまんじゅうにとびついたところ（⑦場面）　(７人)
3．たぬきがきつねをだましたところ（⑨場面）　(５人)
4．きつねがお嫁さんに化けたところ（④場面）　(５人)
5．きつねのしっぽが消えたところ（⑤場面）　(４人)
(以下、略)

このような結果であった。同じ物語なのに、その受容結果には、かなり大きな差異がみられる。この結果について、山本氏の分析を手がかりに考察してみたい。

日本の児童の感想では１位が二つあり、一つは狐がおまんじゅうに飛びつくところ、もう一つは狐がだまされたところであった。３位も二つあって、狐が「ぐえんぐえん」と泣いて山へ帰るところと、まんじゅうがはねあがったところである。このことから、日本の子どもたちの関心は、「きつね」と「おまんじゅう」に集中していることがわかる。

それに対して、韓国の児童の感想は、どちらかといえば「たぬき」の方に関心を示していた。１位は圧倒的に狸が狐をからかう場面であった。その理由をみると、威張っていた狐がだまされたから、威張っていたのでやっつけられて面白かった、からかう言葉（韓国語で「オルレリコルレリ　モッポヨー」）が面白い、などである。２位は狐がおまんじゅうにとびついたところで、おまんじゅうは狸の化けたお供えである。３位は二つあって、たぬきがだましたところと、狐が化けたところである。５位は狐のしっぽが消えたところであった。

この比較から、上位を比較してみると、はっきりとした違いがみられた。韓国の子どもたちは、勝った狸の方により強い関心を示す傾向がみられた。狸は威張っていた狐に「ばけくらべ」で勝った、というところである。それに対して、日本の子どもたちは、負けた狐の方に関心を示す傾向がみられたことである。

作者の松谷は、「きつねが　たぬきに　とっても　いばって　てがみ　かいたの」「こら　たぬき　ばけくらべを　しよう」「すぐに　おみやの　まえまで　やってこい」と、狸を見下すような「語り」で表現している。つまり、この物語は、狸が威張っている狐に「ばけくらべ」で勝った、というストーリーである。そのような明快な「教訓」が主題となっている。その意味では、韓国の児童は実に素直にこの明快な「教訓」を読み取っていた、といえる。

一方では、日韓児童に類似した結果もみられた。オノマトペの表現に対する興味・関心である。「ぐえんこ　ぐえんこ」(「オルレリ　コルレリ　モッポヨー」)、「しゃーん　しゃーん」などは、昔話に特有のオノマトペ表現であり、日韓の子どもたちの耳を確かにとらえていた。異文化としてのオノマトペ表現は、異文化理解の基本的なキーワードになると思われる。

2）問2「2．きつねさんかたぬきさんにお手紙をかきましょう。えらんだわけも書いてください」

この問いに対しても、日韓の児童に差異がみられた。狐か狸か、選んだ児童の人数にはそれほどの差はなかった。日本の子どもたちは、「きつねさんへの手紙」(24人)「たぬきさんへの手紙」(12人) であり、韓国の児童は「きつねさんへの手紙」(20人)「たぬきさんへの手紙」(16人) であった。日韓とも「きつねさんへの手紙」が多く、韓国ではその比率が日本の児童より多い。問題はその手紙の内容である。ここでも、山本氏の分析をふまえて考察してみると、以下のようなことが指摘できる。

日本の児童の場合、「きつねへの手紙」で一番多いのは、「いっぱいしゅぎょうして、もう一度ちょうせんしてね」のような狐をなぐさめる内容で、60%を占めていた。２位の「くやしいでしょう」「かなしいでしょう」「ざんねんでしょう」という同情的な手紙をあわせると80%にもなる。負けた狐に同情し、なぐさめる、という内容である。「きつねに手紙を書いたわけ」も「勝負に負けてかわいそうだから」「なぐさめたい」という理由が多い。「たぬきへの手紙」では、「勝ってよかったね」「ぼく（わたし）も化けてみたいな」というような手紙であった。このように、日本の子どもたちの手紙では、負けた狐に対して、励ましたり同情する手紙が多く、韓国の児童と比べて際だつ特徴となった。

韓国の児童の場合も、狐への手紙が多かったが、その内容をみると、同情的な反応はきわめて少ない。逆に、「だまされたね」「おろかだ」「これからはだまされないように」といったように、狐を諭すような内容、「なぜそんなにだまされやすいの」というたしなめるような内容が多くみられた。また、韓国児童の「たぬきへの手紙」では、「おめでとう」という子、「化けじょうずだ」「天才だ」という賞賛を入れると44%にもなる。きつねを諭す、たしなめるのとは対照的な反応であった。韓国の子どもたちは「かしこい」という言葉をよく使っていた。「たぬきさんはかしこい」「たぬきさんのようなかしこさを身につけたい」というような感想である。

この結果からは、日韓の児童は、登場人物に対して異なった関心をもっていることがわかる。テキストとした昔話は、自分の力を過信し、おごる狐が狸との「ばけくらべ」によって負かされてしまう、というストーリーである。韓国の児童は、このストーリーを素直に受容している感想が多い。その意味では、昔話を昔話として読み取っているといえる。それに対して、日本の児童の反応は、意外な傾向をみせたのだった。「ばけくらべ」に負けた狐に対して同情的な感想が多く、負けた狐に対する「やさしい」「おもいやり」を示していた。このように、日韓の児童はの多くは、狐と狸に対して特徴的な反応をみせていた。

３）物語受容の共有－感想交流の試み

この研究は二つの実験授業で終わったのではなかった。授業が終わった後で、「感想文の相互交流」を試みることにしたのである。当初の計画にはなかったことであったが、韓国の授業で子どもたちを観察していると、日本の子どもたちと、もっと交流したがっているように見えた。そこで、同じ物語を読んだ日韓の子どもたちに、今度は子ども同士の交流をさせてみてはどうか、ということになった。「きつねさんへの手紙」「たぬきさんへの手紙」を翻訳して、それぞれの学級で読んでもらう。そして、相手学級の子どもたちに「お手紙を書く」という「作文」による相互交流である。同じ物語を共有した日韓児童の相互交流という点にねらいがあった。

韓国の児童に対しては、「同じ絵本を勉強した日本の３年生の、きつねやたぬきにあてた手紙です。これらの手紙を読んで、日本の３年生におたよりを書きましょう」と指示した。日本の児童に対しても同様である。その結果、以下のような手紙のやりとりが行われた。(代表的な事例を紹介しておく。)

【韓国の子どもたちへの手紙】

・（かん国の３年生へ）日本の３年生と考えがちがうね。かん国の３年生はきつねを少しせめているけど、ぼくたち日本の３年生はなぐさめるように書いているよ。でも、みんな、手紙を書くのが上手だね。ぼくたち日本の３年生にもよくつたわってきたよ。(H・Tより)

・（かん国の３年生のみなさんへ）こんにちは。わたしはM・Aといいます。かんそうが同じ人と、まったくちがう人がいました。なかには、「へぇー、そんな考えがあるんだ」と思う文もありました。先生に、かん国では「千と千ひろのかみかくし」をみんな知っているとききました。でも、かん国では「千と千ひろのゆくえふめい」というだいだと聞いて、びっくりしたよ。かん国ではほかにどんなアニメがはやっているんですか？知りたいな。おへんじくれるといいな。(M・Aより)

・（Yさんへ）わたしもあなたといっしょで、たぬきさんに手紙をかきました。わたしも一度でいいからばけてみたいなあ。わたしはたぬきさんのばけるすがたをみて、むずかしそうだなと思ったよ。わたしは今、はんぐるもじをれんしゅうしています。じょうずになったら、かん国のいろんなことにちょうせんしたみたいと思っています。(チョヌン　K・Y　ハムニダ。)

【日本の子どもたちへの手紙】

・（K・Tへ）アニョン　私は３年５組のO・Jよ。私はあなたについて知らないけど、あなたがきつねにかいた手紙を読んで、その内容がよくて手紙をかいたの。あなたはとてもやさしい子でしょう。なぜかというと、あなたは化けくらべで負けたきつねをなぐさめてあげるじゃない。私はたぬきにかいたわ。私は手紙でたぬきをちょっとしかりつけたの。きつねとしたしくしたらいいのに、からかうじゃない。あとで、わたしたち、会えたらいいな。話をしたいな。私たち、一ど会おうね。それじゃ、アンニョン～（O・Jより）

・（K・Tへ）あなたは手紙をとてもじょうずにかくね。まだ会うことはできないけど、あなたと友だちになりたい。いつか日本に行って、あなたと会えたらいいな。むかしは私たち

韓国とあなたの日本が戦ったけど、もう戦争は終わったから、むねのなかにしまっておくようにしようよ。私たち、会うことができたら、友だちになろう。アンニョン～（F・Kより）

・（U・Rへ）ぼくは韓国にすむS・Hっていうんだ。きみは文章をみじかくかくようだけど、一ばんじょうずだとおもったよ。この手紙をみたら、へんじをかいてほしいな。きみのすむ日本ってどういうくになのかな。韓国には山が多くていい。ぼくのかんがえでは、きみのすむ日本は海がおおいとおもう。こんど韓国にくることになったら、ぼくといっしょに、山を見にいこうね。それじゃ、アンニョン（S・Hより）

子どもたちにとって、初めて書いた外国の子どもへの手紙であった。子どもたちの手紙には、相手に対する親しみと関心であふれていた。同じ物語を共通したことの親しさが大きく作用したように思われた。狐や狸に対する感想が同じこと、違うこと、そして、相手への関心、相手の国への興味などが、子どもらしい目をとおして書かれていた。山本氏の分析によれば、日本の子どもの手紙には絵本の感想についてのものが多く、韓国の子どもの手紙には絵本の感想だけでなく、会いたい、友だちになりたい、韓国に遊びに来て、日本に行きたい、などの感想が多くみられた、という。たしかに、上の手紙をみてもそういう傾向はみられる。

今回の実践研究はここまでの展開であった。が、この後でも、日韓児童のこのような手紙を「きっかけ」に、さらに交流を深めていくことも可能である。そして、子ども同士の継続的な交流活動へと発展させていくこともできる。異文化理解の教育にゴールはない、と私は考えている。一つのゴールが次のスタートにもなる、そういう継続的な実践交流の試みを、次の段階では考えてみたい。

５．物語受容の背景－道徳教育の比較から

ここでは、先の考察で明らかになった、日韓児童の狐や狸に対する対照的な反応について考えてみたい。ここからは、先行研究に学びながら、比較文化的な視点から考察してみる。

私は、かつて、韓国の絵本『こいぬのうんち』の日韓児童の受容反応を比較分析したことがある。[4)]『こいぬのうんち』（クオン・ジョンセン作）は、うんちであるために誰からも相手にされなくて、つらい思いばかりをしていた「うんちくん」が、たんぽぽと出会い、たんぽぽの美しい花を咲かすのには、うんちは欠かせないことを知る。そして、土に溶けて花を咲かせる、という話である。日本の児童は、このうんちに対して、その気持ちに同情し、「うれしかった」「かなしかった」という感想が多かった。韓国の児童は「私も誰かの役にたちたい」「誰もが自分の生かされるところがある」のような教訓的な感想が多かった。今回の比較研究でも、その特徴と同じような結果となった。

テキストとした『きつねとたぬきのばかしあい』は、くりかえすが、「おごる狐がこらしめられる話」という教訓を主題としている。その教訓を教訓として受けとめた韓国の児童と、負けた狐に「きつねはかわいそう」という同情的な反応を示す日本の児童の違いは、何を表しているのだろうか。この問題を、道徳教育に関するの先行研究をふまえて考えてみたい。

島根大学と釜山教育大学の共同研究において、鈴木文子氏は日韓の道徳教科書の詳細な比較

研究を行っている。[5] 鈴木氏の研究によると、以下のようである。道徳教科書を比較してみると、日韓で育てようとしている社会規範や道徳的価値には明確な違いがある、という。結論的にいうと、「日本の道徳教科書は、意図することを感情に訴えるように表現し、言説としては明確に説明しない」のに対して、韓国の道徳教科書は「教育的意図、問題点を言語化し、子どもに判断させようとする」という点で「大きく異なる」ことを明らかにしている。この違いは、鈴木氏の調査によると、道徳教育の研究者の間でも「心情重視」の日本の道徳教育と「判断力重視」の韓国の道徳教育としてその差異が認識されている、ということである。[6]

たとえば、鈴木氏は、日韓の違いがよくわかる資料として以下の事例を紹介している。日本の道徳教科書、３年生の『決まりじゃないか』という資料である。裕一の学校では雨の日には赤い旗が掲げられ、校庭に出ることを禁止している。この日、雨が止んだのに赤い旗が掲げられたままであった（取り込むのが忘れられていた）。裕一以外の子どもたちは次々に校庭に出ていった。裕一も友達に誘われるが「決まりじゃないか」といってつぶやく。こういう話である。この資料の手引きには、「・裕一が『決まりじゃないか』と言ったときの気持ちを考えてみよう。・決まりを守って良かったと思ったことはありませんか。それは、どんなことですか」とある。

鈴木氏は、この手引きを批判し、ここには「なぜ、旗は立ったままなのか」とか「なぜ、決まりをまもらなければならないか」という「問いかけ」はない。漠然と決まりは守るべきものという前提だけがある、と述べている。今回の比較研究でも、日本の子どもたちは、「裕一の気持ちを考える」ように、負けた狐の心情を気遣い、思いやっていた。人物の心情に共感的に傾斜していく、という特徴である。

韓国の道徳教育の代表例としては、６年生の資料を紹介している。登校途中で二人の少年が重い荷物をもっている近所のおばさんに出会う。一人の少年が「荷物を持ちましょうか」と声をかけるが、女性は学校に遅れるといけないから早く行きなさい、と言う。後でもう一人の少年が、本当に持つ気だったのか、と尋ねると、あのように声をかけるのが「礼儀」で、大人が喜ぶのだ、と言う。そういう話である。この資料には、「おばさんが本当に彼の申し出を受け入れたら、彼はどうなっただろうか」という現実的な問いがある。鈴木氏はこの問いについて「非常に現実的な姿が提示され、表面的な徳目の学習にならないように注意が向けられている」「韓国の教科書には、徳目は掲げられているが、それらを多面的にとらえ、子どもがいろいろな状況を考えられるように設定されている」と、その特徴について述べている。

鈴木氏らの研究によって、日本の「心情重視」の道徳教育と、韓国の「判断力重視」の道徳教育の違いが明らかになった。『こいぬのうんち』や『きつねとたぬきのばけくらべ』にみられた、日韓児童の物語受容の差異は、このような文化的な背景によって生まれたのではないか、と考えることもできる。もっというと、道徳教育に代表される日韓の教育観や文化観・社会観の違いでもある、といえるかもしれない。

６．『ごんぎつね』の受容比較－日本・中国

この問題について、同じ狐の物語として知られる『ごんぎつね』（新美南吉）を例として、

比較文化的な視点から考察してみたい。『ごんぎつね』は、日本の国語教科書の全社に掲載されている、日本の文学教材の代表的な教材である。すべての児童が４年生で学習することから、日本人としてアイデンティティの形成の問題を考えることができる、という指摘もある。[7)]

この教材をテキストとして、中国と日本の児童を対象とした物語受容の比較研究に、付宣紅氏のすぐれた先行研究がある。中・日の児童（４年生）が『ごんぎつね』を読み、共通の設問に答える、という物語受容の比較研究である。[8)] 今回の日韓の研究と同じように、物語受容の比較研究なので、その成果についてくわしくみていくことにしたい。日韓、日中の物語受容の比較から、日本、韓国、中国の特徴が明らかになる、と考えられるからである。この研究からは、以下のような結果が得られている。

	[中国の子ども]	[日本の子ども]
①	・客観的な読み	・主体的な読み
②	・道徳的な判断・評価	・美的な判断・評価
③	・教訓	・感性・感動
④	・読みの集中性	・読みの多様性

付氏は、中国の子どもと日本の子どもの物語受容の違いを、このように四点にまとめている。そして、これらの対比的な特徴について、以下のように説明している。

①では、中国の子どもは、「テキストと一定の距離をもって、批評的な目で物語を判断・評価する」傾向があり、日本の子どもは、「登場人物に寄り添い共感体験をしながら読み進める」傾向がある、ということ。たとえば、ごんが兵十のおっかあの葬式を見て、自分のせいだと思いこむ場面では、中国の子どもは「ごんは反省している」と読むのに対して、日本の子どもは「ごんはやさしい」と人物の内面に共感して読む。この結果について、付氏は、中国の物語文の学習では、一般に、作品の論理、主題、作者の意図などの読み取りを中心にしているので、登場人物と一定の距離を置くことが要求されているからであろう、と推測している。また、中国では、「自能読書」(自己読書力）が重視され、「独立的な思考・分析力」と「素早い判断力」が重んじられている、ということ。そのために、日本のような登場人物の気持ちの深い読み取りは少ない、とも述べている。

②では、登場人物に対する判断と評価において、中国の子どもは「行為の『正しさ』をめぐって、道徳的な尺度で判断・評価する」傾向にあり、日本の子どもは「『やさしい』『かわいそう』のように、人物の立場を理解しようとする判断・評価がみられる」ということ。たとえば、ごんがいわしを盗む場面で、日本の子どもは、盗むという反道徳的行為よりも、ごんの兵十を思いやる気持ちを読もうとする。付氏はこの違いを、「美に対する認識の差異」があるものと推察している。日本の子どもたちの美に対する認識については、文化心理学の文献から、「日本では人の気持ちを傷つけないこと、人や社会と馴染み合うことに、道徳的価値の軸を置く傾向が強い」「道徳的判断における二つのオリエンテーション（Miller&bersoll)、対人的義務と社会的正義のうち、日本では対人的義務が優位である。社会的正義の実現よりも、自分の周りの人間に迷惑をかけないように生きている」を引用し、説明している。[9)] また、中国の語文科（国

語科）教育は、「思想・道徳教育は目標の一つであり、人間形成を意識的に行う教科である」ことと関連づけている。付氏は、また、中国の文化的背景として、『説文解字』では「善は吉訓で、美は善と同意である」、また『論語』に「里仁為美」とあるように、伝統的な儒家文化では善と美は同等なものと考えられている、と説明している。いずれにしても、日中の子どもたちの物語受容に、道徳的価値観や社会的な価値観（美意識）が大きく影響していると考えられる。

③では、中国の子どもは「教訓的な読み方」をし、日本の子どもは「感性的、感動的な読み方」をする、という傾向である。中国の子どもは、ごんに対して、やさしく、自己反省ができ、精一杯の償いをする人物として認識し、「～をしなかったらよかった」「～する方がよかった」「～すべきだった」というような教訓的な感想が多かった。それに対して、日本の子どもは、ごん対して、「やさしい」「情け深い」「かわいそう」「悲しい」「つらい」のように感性的で、感動的な読みの傾向が多くみられた、ということ。付氏によると、中国の語文科の物語指導では「物語における事件や人物に対して分析・批評する」ことと、「実際の生活や自分の経験と関連させる」ことが指導の重点である。また、この調査時に、中国の教師に依頼し、『ごんぎつね』の学習指導案を作成してもらったところ、その案では、「ごんという人物の性格を全般的に、正確に認識する」ことが学習指導の中心に示され、人に対する見方、ものの認識方法の育成をめざそうとしていた、という。授業の最後の一時間では「ごんと兵十の悲劇はどうしたら避けることができたか」「ごんと兵十はどうすれば友達になれるか」について話し合い、「物語の続きを書く」という関連指導が設定されていた。付氏は、この指導案について、「子どもの人間形成や、現実生活に役立てるための意識的な配慮がうかがえる」と述べている。

④は、全般的な特徴ということであるが、中国の子どもの反応は、日本の子どもの反応より「集中的、画一的」であった、という傾向である。この点では、付氏は日本の子どもの「読みの多様性」を評価している。たとえば、「ごんが死ぬ前に兵十に何が言いたかったか」という項目で、日本の子どもの反応には「兵十さん、くりは山にいっぱいあるから、ほしかったらいつでも取りにいってね」といった、中国の子どもにはみられない、「愛らしい、けなげな想像」が見られた。また、各項目のグラフにおいて、「その他」の項目に、日本の子どもの反応がいつも多かった、ということから、日本の子どものには多様な反応がみられた、ということ。この点について、付氏は「日本の子どもの多様で、豊かな想像力は、子どもの視野を広げ、主体的な読み手の育成をめざしてきた文学教育の研究と実践によるものと考えられる」と評価している。

この研究からは、以上のような結果が報告されている。付氏の研究の特徴は、中日児童物語受容の比較から得られた差異について、比較教育、比較文化の観点から分析していることである。中日児童の物語受容の比較から、中国の子どもたちの特徴として、「登場人物とは一定の距離をおいて、批評的な目で判断・評価する」傾向、「道徳的な尺度で判断・評価する」傾向、物語から「教訓を読み取る」傾向、その結果、「集中的、画一的」な受容になるという傾向が明らかにされた。そしてその傾向を、中国の教育目標、物語文の指導法、国家としての儒教思想などの文化的背景との関連性を分析している。

また、日本の子どもたちの物語受容の比較分析からは、日本の文学教育の特徴が明らかになっ

ている。『ごんぎつね』の受容反応において、日本の子どもたちの傾向は、ごんの内面に共感しながら読みすすめる傾向や、人物の内面を共感的におもいやり、感性的、情緒的に読む傾向のあることは、中日児童の比較において、より鮮明になったと思われる。この事実は先の考察において、日韓児童の比較分析でも明らかになったことであった。そして、重要なことは、このような傾向はテキストとしての二つの「きつね」物語だけでなく、日本の子どもたちの物語受容に普遍する特徴ではないか、ということである。この特徴は、裏返すと、韓国や中国の子どもたちのような、「人物に対して批評的な目で判断、評価する」ことや、物語に対する「道徳的、教訓的」な受容はみられない、ということでもある。その意味で、日韓、日中の比較研究によって、韓国、中国の文学教育の特性と、比較の視点から日本の文学教育の特性と、そして課題も明らかになったと思われる。

7.『ごんぎつね』をめぐる問題－比較文化論から

さて、ここまでは、物語受容の比較分析から、日韓、日中児童の読みの傾向について考察してきたのだが、比較研究には、もう一つ重要な分野がある。教材テキストに対する比較文化的研究である。ここでは、そのすぐれた成果の一つ、井上英明氏の「イギリスのキツネと日本のキツネ」という論文を取り上げてみたい。[10] 同じく狐をモチーフとした日英の児童文学を比較文化の視点から読み解いた論文である。この論文では、日本の『ごんぎつね』(新美南吉)と、英国の『ハーキン』(ジョン・バーニンガム)が比較されている。『ハーキン』は英語圏児童文学の古典的な名作として知られている。

まず、井上氏は、『ハーキン』の題名の日本語訳を批判する。原作は『ハーキン－谷へ下りて行ったキツネ』であるが、日本語訳(大石真訳)では『わんぱくこぎつねのぼうけん－逃げろハーキン』となっている。原作のハーキンは「(狩人に見つかるので)谷に下りてはいけない」という父親の「警告」(warn)を聞かないで、子ども特有の好奇心、冒険心にかられて谷に下りていく、という物語である。ハーキンの降り立った「谷」にはおもしろいものがいっぱいあり、ハーキンを魅了する。ある日のこと、ハーキンは森の番人にみつかってしまった。そこでキツネ狩りとなるのだが、「谷」をよく知っているハーキンの機転によって、キツネ狩りの一行は撤退し、ハーキンは落ちていた地主の帽子を戦利品として持ち帰った。それからというもの、キツネ狩りをする人はなくなり、狐たちは自由に谷を駆け回ることができた。この物語で「谷」は、井上氏にいうように、主題に直結する重要なモチーフであることがわかる。

この物語は、次のような印象的なシーンで終わる。

> 今では、ハーキンも父さんになって、大勢の子どもたちと暮らしています。寝る前によく、ハーキンは自慢話を話して聞かせます。子どもたちは、耳を澄ませて、夢中でハーキンの話を聞いています。
>
> でも、ひとりだけちっとも話を聞いていない子供がいます。その子は、そんな父さんの話なんか、すっかり聞きあきているんです。そして、父さんも行ったことのない、谷のむこうへ行ってみたいなと、考えているのです。

井上氏はこの結末について、以下のように述べている。「イギリスの子供たちがいちばん感動し、読後の満足感にひたるのは、この最後の文章である。つねに親を越えて、親ギツネのハーキンでさえ踏み込むことのできなかった谷の向こう、そこは地主様、狩人たちの領域、こんどはそこに自分が行ってみせる、親爺のやれなかったことを倅のおれがやってのける。つまり、キツネ・ハーキン家において前人未踏の分野をきり拓こうとする果敢な精神、これを英国の子供たちは賞賛するのである。」

この物語のどこが、なぜ、イギリスの子どもたちに愛され続けてきたか、よくわかる解説である。初めの題名にもどると、「ハーキン－谷へ下りて行ったキツネ」という題名でないと、この物語の主題は表せない。「わんぱくこぎつねのぼうけん－逃げろハーキン」では「わんぱくこぎつね」の単なる冒険物語となって、原作の主題はとうてい表現できない。原作の「Harquin：The fox who went down to the valley」の「谷へ下りて行った」ところが、イギリスの子どもたちの感動を誘うのだ、ということ。そして、「ひとりだけちっとも話を聞いていない子供」が「父さんも行ったことのない、谷のむこうへ」行ってみたいな、と夢見ることで、この物語は終わる、ということ。物語はここで終わるが、読者であるイギリスの子どもたちは、「父さんも行ったことのない」「谷のむこうへ」行ってみたいと夢見る子ギツネに、自分たちの夢をふくらませる。英国児童文学の特徴をよく表している作品といえる。

井上氏が『ハーキン』を例としたのは、『ごんぎつね』の問題を際だたせるためであった。井上氏は『ごんぎつね』を「日本人のメンタリティを集約的に表現した作品」とみていて、ハーキンの物語と読み比べていく。井上氏が注目するのは、『ごんぎつね』の結末に象徴されている「日本人のメンタリティ」の問題であった。

『ごんぎつね』の最後の場面で、ごんは兵十によって鉄砲で撃ち殺される。土間には栗が固めて置いてあり、それを見た兵十が「ごん、お前だったのか。いつもくりをくれたのは」と言うと、ごんは、ぐったり目をつぶったまま「うなずく」。日本の子どもたちが感動するシーンである。井上氏は、この結末の「死をもって理解されたごん」に「日本人のメンタリティ」を見いだしている。そして、この作品には「自分が理解さえしてもらえれば、殺されても本望だという発想」がある、という。新美南吉の初稿では、「ごんはうれしくなりました」と、ごんの気持ちを書いていたが、巽聖歌が削除したことはよく知られている。

『ごんぎつね』をめぐるこの問題について、井上氏はイギリス人と日本人の思考の違いについて、比較文化の観点から次のように述べている。

> 日本産のキツネ、ごんは死ぬ間際、兵十に「お前だったのか」と分かってもらい、それにうなずいて満足げに死んでいく。そこに感動がある。イギリスのキツネはどうかというと、親爺のハーキンがあんな冒険をやってのけて、地主様の帽子を勝利品として持ち帰ったけれど、こんどはこの俺が谷のもっと向こうへ行ってやる。イギリスの子供たちがよろこぶのはそういうところである。(中略) このようにして、ハーキンは、つぎからつぎへと谷や泥んこ沼を越えていくのにたいして、日本のキツネごんは、人間の兵十と仲良くなりたいと願ったばかりに、殺される結末となる。死んだ後に理解されても、兵十が痛恨の涙にくれて贖罪の人生をかりに送ったとしても、ごんは救われないと判断するのが『ハーキン』をよろこぶ

イギリスの子供たちである。

井上氏の関心は、『ごんぎつね』というより、『ごんぎつね』をすぐれた教材としてきた「日本人のメンタリティ」を問い直すことにあった。『ごんぎつね』だけを見ていたのでは、見えなかった問題である。井上氏は、最後に次のような提言をしている。

最後にわたしが言っておきたいのはつぎのことである。四、五歳から一二歳ぐらいまでの子供に、『ハーキン』で育った子供がいる。それを日本語で読んだ子供がいる。そして学校公教育において検定教科書『ごんぎつね』で育てられた子供がいる。かれらがそれぞれ大人になったらどうなるかということである。わたしはその違いを深刻に受けとめる必要があるように思う。イギリス人と日本人の思考の原型となるべきものが、多少オーバーにいえば、このたかだか二冊の童話によって非常に違ってくるのではないだろうかとも思う。

『ごんぎつね』を異文化の視野からとらえた見解である。このような見解はこれまでの『ごんぎつね』研究史にはみられなかった。同じようなことは、今井康夫氏によって、日米比較文化の視点から言及されている。[11] 今井氏は、日米の国語教科書調査から、日本の教科書には「深刻な話」が多く、「戦争の悲惨さ、自己犠牲、心のやさしさ」をテーマとしていて、「悲しみに耐えたり、自分を犠牲にしながら、素直な良い子に育っていく」というストーリーに特徴がある、としている。『ごんぎつね』はその典型的な作品で、「別離、死、自己犠牲、心のやさしさ」のすべての要素をもっていて、「深刻で、内向きで、求道的で、やさしい」日本人の姿をよく表している、と述べている。今井氏もまた、比較文化の視点から、『ごんぎつね』にみられる日本人の「思考の原型」を問題としている。

日本の文学教材は、これまで、比較文化の観点から批評されることは少なかった。井上氏の論文は、『ハーキン』という異文化の狐物語を鏡として、『ごんぎつね』にみられる日本人の「思考の原型」を明らかにする。今井氏も『ごんぎつね』に日本人特有のメンタリティを見出している。比較文化の視座からでないと見えにくかったテキスト批判である。日本の文学教育を異文化の視点から見直していく、このような比較文学教育の分野は、これからの日本の文学教育研究では不可欠の分野になると思う。比較文学教育とは異文化の視点から日本の文学教育の根底を問い直すことになるからである。[12]

注

1）足立悦男「昔話に関する日韓の比較・考察」(共同研究「日韓子ども文化の比較研究」)『教育実践研究』第９号，島根大学教育学部附属教育実践研究指導センター，1997。同「日韓国語教科書の昔話・民話教材」『日韓相互理解教育プログラムの開発研究－子ども文化の比較を通して』有馬毅一郎代表、文部省科学研究・国際学術研究　1999。

2）足立悦男「比較文学教育の試み－日韓・子ども文化の比較をとおして」『日本文学』2000年１月号　日本文学協会。

3）文旨初等学校では、錦織明「海を渡った神様」(６年２組)、山本美千枝「きつねとたぬきのばけくらべ」

(３年５組)、同「天人にょうぼう」(５年７組）の授業を行った。錦織氏の授業は島根県日韓合同民話授業研究会『教室からアジアが見えるとなりのくに観国Ⅱ』（2004）に収録。山本氏の授業は『日韓昔話絵本の比較と教材化の研究』(修士論文　2004）を参照。

４）足立悦男「日韓文学教材の実践交流－絵本『こいぬのうんち』をめぐって」『月刊国語教育研究』日本国語教育学会　2001年７月号

５）鈴木文子「道徳教科書にみる日韓の社会的規範と教育観」『日韓相互理解教育プログラムの開発研究－子ども文化の比較を通して』有馬毅一郎代表、文部省科学研究・国際学術研究　1999。

６）森岡卓也・金得洙「日・韓両国における道徳教育の比較研究」『大阪教育大学紀要』第14巻１号，1992。

７）府川源一郎『「ごんぎつね」をめぐる謎』教育出版　2000。

８）付　宣紅「日中両国における子どもの読みの比較研究－『ごんぎつね』の場合－」『国語科教育』47集，全国大学国語教育学会，2000。北京市白云路小学校４年の２クラス（70名）と広島大学附属小学校４年の２クラス（78名）の比較研究で、1999年に実施された。

『ごんぎつね』の内容に関する以下の九つの問いに答える、というアンケートを行い、結果をデータ処理してグラフに表し、その特徴を比較分析する、という研究である。

・兵十のとらえた魚を全部川の中へ投げ込んだとき、ごんはどういう気持ちでしたか。・穴の中で考えているごんについて、ごんはなぜそう思ったのですか。ごんについてどう思いますか。・いわしを兵十の家に投げ込んだごんについて、兵十はどう思ったのか。あなたはどう思いますか。・「兵十のかげぼうしをふみふみいきました」という描写から、ごんのどんな気持ちがわかりますか。・加助が神様のしわざだと思いついたことから、この村の人たちのつながりはどんなつながりだと考えますか。・「その明くる日も」くりをもっていったごんを、どう思いますか。・ごんは死ぬまえに何か言いたいことがあったと思いますか。想像して書いてください。・ごんが兵十に撃ち殺されるという悲劇について、どう思いますか。何を考えましたか。・この物語はすきですか。(一部簡略化したところもある。)

９）柏木恵子ほか編『文化心理学－理論と実証』東京出版会　1997。

10）井上英明「イギリスのキツネと日本のキツネ」『異文化時代の国語と国文学－比較日本文化学の試み』サイマル出版会　1990。

11）今井康夫『アメリカ人と日本人－教科書が語る「強い個人」と「やさしい一員」』創流出版　1990。

12）足立悦男「これからの文学教育－比較文学教育の試み（日本と韓国)」『国語科教育』第54集，全国大学国語教育学会　2003。